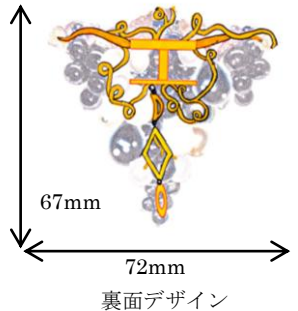


<メガリング～巨大指輪>

“これで何か作られへん？”と両掌のジュエリー。小柄な体に濃紺ニットジャケットのさっぱりした笑顔。たくさんのジュエリーをつけこなしていると見受けられる。“全てお任せ頂いてもよろしいですか”“手の甲いっぱい指輪を作ります。”初対面の人の Re-Design は受けないシマダではないか？ この先どんな苦難が待ち受けるかも考えずに言っていた。大きな面を裏で如何に支えかつ使い心地をよくするか。表面デザインより裏の構造に悩み続け画にするのに数か月。その間、矢のような催促。制作途中も度々の職人との細部打ち合わせ。ふとした思いつきを後悔するほど。仕上がりは、手の甲中指上から爪手前まで、横は小指から人差し指と面積も重量もメガトン級。やがて一報。“大変喜ばれて来月のヨーロッパ旅行にと大満足”とのこと。あの笑顔が浮かびホッ。



<奇怪、多肉植物>

キュートな姿に手入れ簡単なサボテン大好きシマダ。室内のあちこちに、猫の肉球が連なったり、どこに伸びるのか不思議な姿。庭木も極力色を抑えサラサラそよぐ利休梅やアオダモ。その近くにアガベという種類のサボテンを植栽。このアガベ、何回となく失敗の末、地植えに挑戦。周囲をモノともせずワイルドに成長する逞しい姿への成長を目指す。アガベの隣には、デボニエンシスというエレガントなバラが立つ。1本の木に白、淡いクリーム、ほんのりピンクの花がつく。主張せず優しい。この狭い庭に際立つ色は薄オレンジのマロニエのみ。爽やかな春の饗宴。



<Smoked Takuan with Cheese 燻製沢庵チーズ和え>

やっとの一区切りで得た自由日。行くぞ！とシマダ運転。友人はナビとランチの予約、ガイド役。真っ直ぐ伸びる木々の間にそよぐ緑とおいしい食事に癒された後はチューリップの花びらを敷き詰めた遊歩道を散策。様々な作家たちのギャラリーを覗いた後は地域住民の出店を回る。天然酵母パン、自然素材デザート etc. そんな中に見たこともない野菜が並ぶ台を発見。私は鳥？と時折思う程に野菜中心食生活のシマダ。見逃す筈がない。薄茶色のこれ沢庵？と思しきものが。“これ主人がいつの間にか作りましてね。”というご夫婦は近隣農民風ではなく無理なく知的におしゃれ。“スモークした沢庵をマスカルポーネチーズであえただけ。これが美味しいんですよ”このいぶりがっこ風沢庵。ワインやフランスパンにもあいそう。田舎も都会風になったものよ、と感心。楽しい山梨の休日でした。



燻製沢庵&千切りのチーズあえ
(みじん切りを豆腐にトッピングもおいしい)

<NY をアメリカと思うな>

初めてのNY行きが決まった時は余り気乗りがしなかった。アメリカへの憧れもなく“仕事で必要なら仕方ない、行くか”くらいの心を読んだかのような友人の言葉。“NYはアメリカではない。NYというもうひとつの国”—それは面白いかも、と出かけた。その街は今迄見たアメリカの街ではなかった。全てがキビキビとリズムカルに動き、オフィスの女性達もそうだった。ここは別物、新鮮に輝いていた。たまたま入った小さなデパート。ここでの衝撃は忘れられない。デパートを超えたデパート。何年もたってから、このデパートを基に映画が作られた。ここを訪れたのを機に世界的なデザイナーとなった人達の物語。やはりそこはそのような力を持っていたのだ。そこだけではない。小さなカバン



屋さん、何を扱うのか解らない店。多くを見せない店。道の反対側から見て面白そうと1軒の店に近づく。ドアを開けられ、“ごめんなさい。表からのディスプレイが面白かったので。買い物はしないけどよろしいですか？”日本では放っておかれるだろうが彼らは違った。“興味をもってくれてありがとう。この店は…”

とその店のコンセプト、得意なことや気をつけていることなど説明。そして表に出てディスプレイのどこに興味を持ったのかと尋ねる。そこには日本特有の曖昧な謙虚さはなく、自分の仕事をしっかり自覚している人の心地よい爽やかさがあった。確かにNYはNYというひとつの国だった。

